



決め手は、青森県産。
特産果樹生産情報第5号
(8月1日～9月1日)



令和2年7月31日発表
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

**夏季管理の徹底と適期収穫を！
夏場の病害虫防除を万全に!!**

I 要約

- 露地ぶどうは、適正着果及び過繁茂防止に努める。
- 無加温ハウスぶどうは、品種特有の着色や糖度などで総合的に判断し、適期収穫に努める。
- ももやなしでは、樹冠内部へ日光を入れるため、徒長枝の整理や支柱入れ、枝吊りを行う。なお、果実に日焼けが発生しないように注意する。
- ももは、果実の着色や地色の抜け、手触りなどで総合的に判断し、適期収穫に努める。また、せん孔細菌病は、新梢に発生する夏型枝病斑が伝染源となるので、見つけ次第、枝ごと切り取って処分する。
- シンクイムシ類、カメムシ類、ハダニ類や西洋なしの輪紋病、黒斑病など病害虫の発生動向に十分注意し、適正な防除に努める。
- 台風等に備え、風害防止対策を万全にする。

II 生産情報

1 生育概況

無加温ハウスぶどうの「キャンベル・アーリー」の着色始めは、三戸（県生育観測ほ）で平年より9日遅い7月25日であった。着色日は、五戸（県南果樹部）で平年より4日早い7月28日であった。

もも、西洋なしの果実肥大は、五戸で7月30日現在、平年を上回っている。

無加温ハウスぶどうの着色始め（三八地域県民局調べ）（月．日）

地 点	品 種	本 年	平 年	前 年
三 戸 町	キャンベル・アーリー	7.25	7.16	7.22

注) 平年値は過去20か年の平均値

無加温ハウスぶどうの着色日（県南果樹部調べ）（月．日）

地 点	品 種	本 年	平 年	前 年
五 戸 町	キャンベル・アーリー	7.28	8. 1	7.31

注) 平年値：2005～2019年（15年間）の平均

もも、西洋なしの果実肥大（7月30日現在、横径cm、%）

地 域	樹 種 (品 種)	本 年	平 年	前 年	平年比
五 戸 (県南果樹部)	も も (川中島白桃)	5.4	5.0	5.0	108
	西洋なし(ゼネラル・レクラク)	5.8	5.7	6.3	102

注1) 平年値：ももは2009～2019年（11年間）の平均

なしは2000～2019年（20年間）の平均

2) ももの横径は、縫合線を挟んで測定した最大径

2 作業の重点

(1) ぶどう

ア 結果枝の管理

葉数を早めに確保することは、着色期及び成熟期を早めるので、着色が始まる頃までに葉数を20～25枚は確保する。着色後の樹勢は新梢がわずかに伸長する程度が望ましいが、その後もかなり新梢が伸びる場合は随時摘心する。

また、結果枝が混んでいる場合は摘梢するとともに誘引を行い、過繁茂防止に努め、果房や結果枝の基部まで日光が十分に当たるようにする。

イ 露地栽培

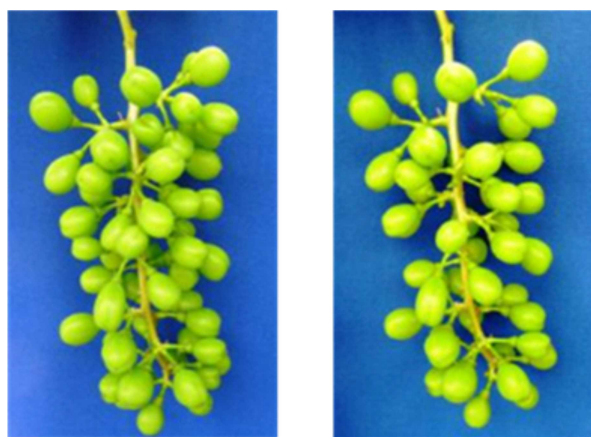
(ア) 摘粒

摘粒は、粒数や果房の大きさを制限することにより、果房の品質を向上させるほか、スチューベンなどの密着型の品種では裂果の防止にもなる。

品種別摘粒程度の目安は次表のとおりであり、摘粒は果粒軟化期前（例年では8月上旬頃）には終える。小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側の果粒を除去し、目安の果粒数にする。

品種別目標果房重と果粒数（摘粒の目安）

品 種	果房重（g）	果粒数（粒）	1粒重（g）
スチューベン	300	70～80	4.0
キャンベル・アーリー	300	50～60	5.5
シャインマスカット	450～550	40～50	12～13



シャインマスカットの摘粒前後の果房
（左：摘粒前（61粒）、右：摘粒後（45粒））

(イ) シャインマスカットの袋かけ

無袋栽培では「かすり症」による品質低下が問題となるので、有袋栽培を行う。袋かけは摘粒を終えてから、果粒軟化期頃（例年は7月下旬～8月上旬）に行い、収穫時まではずさない。また、気温が30℃を超える極端に高温な日や時間帯は日焼けを助長する場合があるので袋かけは行わない。

なお、袋かけ前には必ず薬剤防除を行う。

ウ 無加温ハウスの温度管理

ハウス内が高温になると果実の日焼けなど高温障害の発生が懸念されるので、ハウスのサイド、妻及び屋根の谷間部分の被覆資材を巻き上げるなどして換気する。

エ 収穫

収穫は品種特有の着色を示し、芳香を放ち、食味も良くなり固有の風味に達してから行う。収穫時の糖度は、屈折糖度計でキャンベル・アーリーでは14%を目安とする。

キャンベル・アーリーはよく着色するため、低糖度の果房や未熟果が収穫されがちなので、果皮色が紫黒となり、果粉に覆われ品種特有の食味に達してから収穫する。

<収穫時の留意事項>

- (ア) 朝夕の果実温度が低い時間に収穫する。
- (イ) 完熟果でも降雨があった直後は糖度が低下し、輸送中の腐敗も多くなるので、なるべく晴天時に収穫する。
- (ウ) 脱粒したり果粉が落ちたりするので、穂軸を持って丁寧に扱う。

オ 病害虫防除

(ア) 薬剤散布

キャンベル・アーリー基準

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
8月上旬	ストロビートライフロアブル 2,000倍 又はホライズントライフロアブル 2,500倍	—————	2500

スチューベン基準

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
8月上旬	アミスター10フロアブル 1,000倍 又はストロビートライフロアブル 2,000倍 又はホライズントライフロアブル 2,500倍	—————	2500

注) ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブルとストロビードライフロアブル及び同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。

(イ) ベと病対策 (スチューベン対象)

発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長く溜まらないようにする。

例年秋季に葉での発生が多い園地では、「8月中旬」にレーバスフロアブル3,000倍を特別散布する。レーバスフロアブルは薬剤耐性の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。

(ウ) 晩腐病対策

発病果粒や発病果房は見つけ次第摘み取って、土中深く埋めるなどの処分をする。また、園地内の排水や通風を良くし、過湿にならないようにする。

(エ) 灰色かび病対策

新梢の摘心や誘引を適切に行い、園地内の通風を良くする。発病葉、発病果及び発病枝はできるだけ早く取り除き、土中に深く埋めるなどの処分をして、二次伝染を防ぐ。ハウス栽培では室内の換気に努め、過湿にしない。

長期貯蔵向けのスチューベンでは「8月下旬～9月上旬」にフルーツセイバー1,500倍を特別散布する。フルーツセイバーは薬剤耐性の懸念があるので、年1回の使用にとどめる。

(2) も も

ア 徒長枝の整理、支柱入れ、枝吊り

太枝の背面や先端部から伸びた生育旺盛な徒長枝は除去し、日当たりを良くする。なお、切り取る際は、日焼け対策として、葉芽が必ず残るように5～10cm程度を残して切る。

また、果実の肥大とともに、枝が下がり、重なり合ってくるので、支柱入れや枝吊りを行う。

ただし、高温・晴天が続く場合は、果実の日焼けを起こさないように、徒長枝の整理、支柱入れ、枝吊りなどは控える。

イ 摘葉

ももは果実に直接日光が当たらないと着色しにくいので、徒長枝の整理や支柱立て、枝の吊り上げなどを行った後、果実に触れている葉を数枚摘み取る。摘み取り過ぎると外観や品質の低下を招くので注意する。

ウ 除袋と着色手入れ

除袋の適期は概ね収穫の10～14日前頃である。除袋時期が早過ぎるとくすんだ赤色となり、収穫までの日数がかかる。遅過ぎると着色が不十分なうちに収穫期を迎えてしまう。

目安としては、果実が品種本来の大きさになり、果皮が全体的に白みがかかり地色が5～6割抜けた（果梗部と縫合線周辺に青みが残る）頃とする。ただし、天候不順が予想される場合は除袋時期を2～3日早める。

除袋後は果実に直接覆いかぶさっている葉を摘み取る。

エ 反射資材の利用

反射資材を敷くと、樹冠内の光環境が改善され、樹の内部や下枝の果実の着色向上に役立つが、着色が先行するため、未熟果を収穫することのないよう、収穫適期の見極めには十分注意する。なお、直接的に日光を反射する資材は果実の日焼けを招くことがある。

無袋栽培では、収穫予定日の7～10日前を目安に敷き、着色が完了次第速やかに除去し、過着色を防ぐ。

有袋栽培では、収穫予定日の10～14日前（除袋2～3日後の果実の先端部が少し着色し始めた頃）を目安に敷設する。

反射資材の敷設は、早すぎると着色が先行し、未熟果を収穫する恐れがあるが、不順天候が予想される場合は早めに行う。

オ 収穫

収穫適期は果実の着色や地色の抜け、手触りなど総合的に判断する。1樹の中では日当たりの良い南側や西側の主枝・亜主枝先端の大玉の果実ほど早く熟し、樹冠内部は遅れる。樹全体で見ると、収穫期間には10日程度の幅があるため、収穫は数回に分けて行う。

収穫は地色が淡黄緑色になり、着色の良いものから始める。収穫時の糖度は早生種で10%、中生種で11%、晩生種で12%を目安とする。果実の硬さは、手のひらで押さえた時にわずかに弾力を感じ、指で軽く押さえても跡がつかない程度がよい。

収穫直前から高温の日が続くと熟すのが早まるので、こまめに収穫適期を判断する。

カ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10a
8月上旬	ベルコートフロアブル2,000倍 又はストビートドライフロアブル2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍	ダイジール水和剤34 1,000倍 又はダントツ水溶剤 2,000倍 又はジノテフラン剤 2,000倍 〔スタークル顆粒水溶剤〕 〔アルバリン顆粒水溶剤〕 又はテルスターフロアブル 3,000倍 又はスカウトフロアブル 2,000倍	4000
8月中旬	ロブラール水和剤 1,500倍 又はDMI剤	スカウトフロアブル2,000倍 又はモスピラン顆粒水溶剤 4,000倍	4000
8月下旬	ストビートドライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍	スカウトフロアブル2,000倍 又はモスピラン顆粒水溶剤 4,000倍 又はジノテフラン剤 2,000倍 〔スタークル顆粒水溶剤〕 〔アルバリン顆粒水溶剤〕	4000
9月上旬	ロブラール水和剤 1,500倍 又はDMI剤	—————	4000

注1) ロブラール水和剤とDMI剤は薬剤耐性の懸念があるので、それぞれ年1回の使用にとどめる。

※DMI剤

〔 インダーフロアブル5,000倍、アンビルフロアブル1,000倍
スコア顆粒水和剤2,000倍、オンリーワンフロアブル2,000倍 〕

2) ダントツ水溶剤は、使用時期が「収穫7日前まで」なので、早・中生種に散布する場合、十分注意する。

(イ) せん孔細菌病対策

新梢に発生する夏型枝病斑は伝染源になるので、見つけ次第枝ごと切り取って処分するとともに、被害果も除去する。風を強く受ける地帯で多発するので、防風網の設置などの耕種的対策も併せて行う。



せん孔細菌病（夏型枝病斑）

(ウ) シンクイムシ類対策

幼虫が果実から脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま園地に放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

ナシヒメシンクイの加害による新梢の芯折れは見つけ次第、切り取って処分する。

(エ) カメムシ類対策

断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。

発生が見られる園地では「8月上旬」にダントツ水溶剤、ジノテフラン剤（スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤）、テルスターフロアブルのいずれかを選択する。

(3) な し

ア 徒長枝の整理、支柱入れ、枝吊り

樹冠内部へ日光が十分に当たるように、徒長枝は、将来結実枝として使用するもの以外は早めに切り取る。徒長枝を切る際には高切りせずに、枝の基部からきれいに除去する。

また、立木仕立てでは、果実の肥大とともに、枝が下がり、重なり合ってくるので、支柱入れや枝吊りを行う。

ただし、高温・晴天が続く場合は、果実の日焼けを起こさないように、徒長枝の整理、支柱入れ、枝吊りなどは控える。

イ 西洋なしの収穫

収穫時期が早過ぎると追熟が正常に進まず硬いままとなり、遅すぎると内部褐変などが発生し、食用に適さないので適期に収穫する。収穫適期は気象に大きく左右されるため、満開後の日数、ヨードでんぷん反応、地色などの状況から総合的に判断する。

早生種の満開日からの日数による収穫始めの目安

品種名	満開日から収穫 始めまでの日数	ヨードでんぷん 反応指数	地色指数
プレコース	110日	4～4.5	2～2.5
バートレット	125日	3～3.5	2～2.5

注1) ヨードでんぷん反応指数 (図参照)

2) 地色指数: 「日本なし地色用カラーチャート」を使用し、ていあ部 (果実の尻の部分) のコルク層を薄くはぎ、変色しないうちに比色 (図参照)

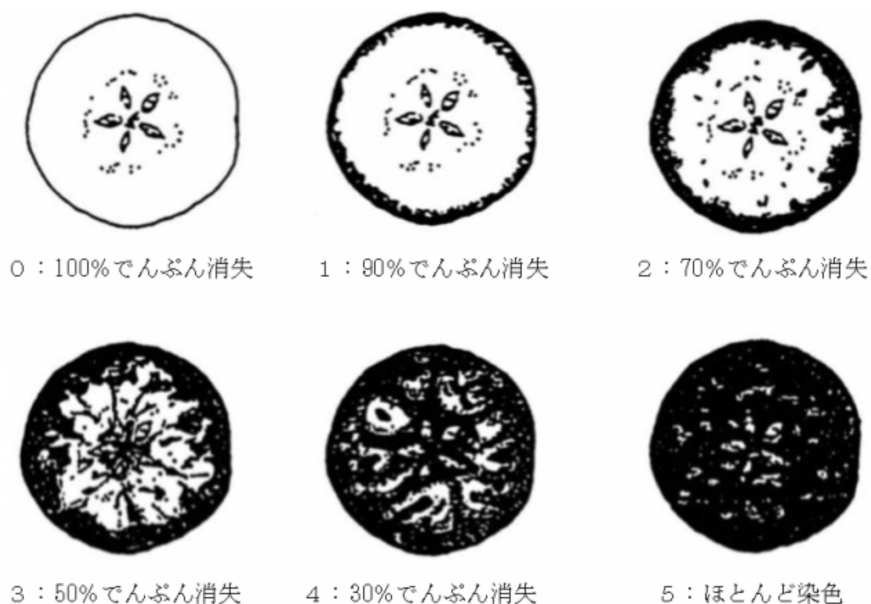


図 ヨードでんぷん反応指数 (でんぷんの消失割合)

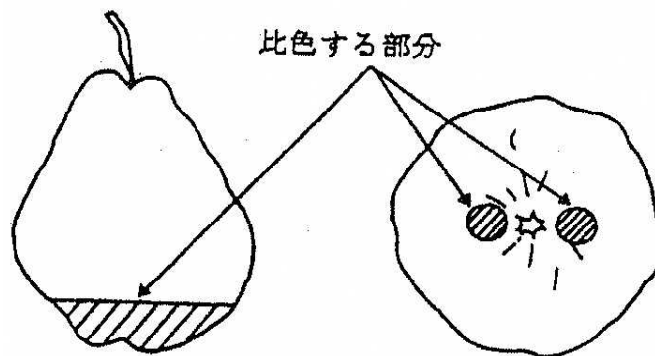


図 地色の見方 (ていあ部)

ウ 日本なしの収穫

収穫適期は糖度や果皮の地色からも判定できるが、食味で判定するのが最も簡便かつ正確である。

なお、ジベレリンペーストを使用した場合、成熟期は5～7日くらい早まる。

エ 病害虫防除（西洋なし）

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10a
8月上旬	オキシラン水和剤 500倍 又はバルコート水和剤 1,000倍	スカウトフロアブル 2,000倍 又はダイジール水和剤34 1,000倍	4500
8月中旬	ストロビードライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍 又はキャブレート水和剤 600倍	スカウトフロアブル 2,000倍 又はテルスター水和剤 1,000倍	4500
8月 最下旬	オキシラン水和剤 500倍 又はキャブレート水和剤 600倍	ジノテフラン剤 2,000倍 (スタークル顆粒水溶剤) アルバリン顆粒水溶剤	4500

注1) プレコースやゼネラル・レクラークなどの早・中生種に散布する場合、収穫前日数に注意して薬剤を選択する。

2) ストロビルリン単剤のストロビードライフロアブル及び同じ系統の混合剤であるナリアWDGは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。

(イ) 輪紋病対策

樹勢が衰えると枝幹が被害を受けやすくなるので、肥培管理に気をつけて樹勢を適正に保つ。発病枝は伝染源となるので、見つけ次第切り取って適正に処分する。

ゼネラル・レクラークやラ・フランスなどの中・晩生種では「8月最下旬」は重要な防除時期になるので、必ず薬剤散布を行う。

(ウ) 黒斑病対策

徒長枝は発生源となりやすいので、不要なものは夏のうちに切り取る。また、発病果は見つけ次第、摘み取って土中に埋めるなど適正に処分する。

発生が見られる園地では、「8月中旬」にストロビードライフロアブル又はナリアWDGを、「8月最下旬」にオキシラン水和剤を選択する。

(エ) シンクイムシ類対策

幼虫が果実から脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま園地に放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

(オ) カメムシ類対策

断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊を見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。

「8月上旬」に発生が見られたときは、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。「8月中旬」に発生が見られたときはテルスター水和剤1,000倍を選択するか、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。

(4) おうとう

ア 追肥

追肥（礼肥）が済んでいない園地では速やかに行う。

施肥量は成木（11年生以上）で10a当たり窒素3.0kg、リン酸1.2kg、カリ2.4kgを目安とするが、土壌条件や樹勢によって加減する。

イ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布

「収穫後」の散布が遅れている園地では速やかに防除を行う。

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10a
収穫後	オーソサイド水和剤80 800倍 又はオキシラン水和剤 600倍 又はチウラム剤 500倍 〔チオノックフロアブル トレノックスフロアブル〕	スプラサイド水和剤1,500倍	5000

(イ) ハダニ類対策

発生の多い場合は、「収穫後」にマイトコーネフロアブル1,000倍、コロマイト乳剤1,000倍、カネマイトフロアブル1,000倍、ダニサラバフロアブル1,000倍、ダニゲッターフロアブル2,000倍、スターマイトフロアブル2,000倍のいずれかを散布する。

(5) うめ・あんず

ア 追肥

追肥（礼肥）が済んでいない園地では速やかに行う。施肥量は成木（9年生以上）で10a当たり窒素2.8kg、リン酸1.2kg、カリ2.0kgを目安とするが、土壌条件や樹勢によって加減する。

イ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10a
収穫後 (7月下旬～ 8月上旬)	トップジンM水和剤 1,500倍 又はストロベートドライフロアブル 2,000倍 又はロブラル水和剤 1,500倍	—————	3500

(イ) カイガラムシ類対策

発生が多い樹では、収穫後の8月上旬～中旬（幼虫ふ化最盛期）にアプロードフロアブルを特別散布する。

(6) 乾燥対策

干天日（降水量5mm未満の日）が2週間程度続いたら、苗木や若木を中心に1㎡当たり200程度をかん水する。また、草からの蒸散を防ぐため、草刈りをこまめに行い、樹冠下に敷き草する。

(7) 風害防止対策

台風等に備え、棚、支柱、防風網等を再度点検し、必要に応じて補強や補修等をする。また、幹や主枝などに空洞などが生じている樹は支柱で支え、縄などで補強する。幼木は倒伏しやすいので支柱を立てて結束する。

《 農薬使用基準の遵守 》

青森県農薬危害防止運動期間中（5月1日～8月31日）！

農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認する。

また、短期暴露評価の導入により使用方法が変更される農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用する必要があるため、変更の有無を次のWebサイトで確認してから使用する。

○農林水産省「農薬情報」

http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/

○(独)農林水産消費安全技術センター「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

○青森県農業情報サービスネットワーク「アップルネット」農薬情報

<https://www.applenet.jp/>

農薬の使用にあたっては、事前に周辺住民に対し、農薬の散布日時や使用者の連絡先等を十分な時間的余裕を持って知らせる。また、農薬の飛散により、周辺作物や近隣の住宅等に被害を及ぼすことのないように農薬飛散低減対策に留意して散布する。

